

グローバル教育推進事業

グローバル人材の育成を図るための教育プログラムの開発・実践

～高知南中・高における英語教育プログラム～

高知県教育センター 学校支援部 研究開発・グローバル教育担当

1 研究目的

社会や経済の急速なグローバル化に伴い、高度な英語運用能力とともに、論理的思考力や課題解決能力、コミュニケーション能力等を備えた人材育成が必要とされている。そして、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（文部科学省、2013）」、「高知県英語教育推進のためのガイドライン（高知県教育委員会、2015）」においても、英語によるコミュニケーション能力を確実に養うことが求められているところである。そこで、「生徒が授業や課題研究に取り組む中で、論理的思考力や判断力、表現力を身に付けるとともに、英語運用能力の向上を図り、将来グローバル人材として活躍できる資質を育成する」ことを目的とし、英語教育プログラムの開発・実践を行う。

2 研究体制及び研究方法

本研究は、平成26年度に高知県教育センターと研究協力校である高知県立高知南中学校・高等学校（以下、「高知南中高」という）が、中高一貫校の特色を生かした系統性のある指導を目指し作成した「6年間のイメージ」、「6年間のシラバス」を活用した英語教育プログラムの開発・実践である。平成27年度中学校1年生からスタートさせ、本年度は研究の2年目である。

「6年間のイメージ」には、「高校卒業時に英語を用いて～ができる」というゴールを設定し、高3から中1へと逆向きに設定した各学年修了時の学習到達目標を示している。そして、「6年間のシラバス」は、その学習到達目標を達成するための各学年の学期ごとの指導計画であり、学習内容、言語活動、パフォーマンステスト等を示している。この二つにより、中高英語担当教員が全学年で付けたい力と学習内容を把握することができる。

高知南中高では、グローバル教育校内委員会、英語教育推進チーム会を設置し、進捗状況を確認しながら研究を推進している。そして、高知南中高に常駐する教育センター指導主事とその他の教育センター指導主事とが連携・協働し、指導・助言している。また、「高知南チーム」として取り組めるよう、教科会を実践内容やその結果を共有し次の方向性を確認する場として位置付け、PDCAを機能させている。研究成果を検証するため、全生徒を対象に「英語学習への意識・実態把握調査」（以下、「生徒意識調査」という）を平成27年度から年2回、英語担当教員を対象に「英語教育プログラム意識調査」（以下、「教員意識調査」という）を平成28年度に1回実施した。そして、高知県グローバル教育推進委員会（年3回開催）で進捗状況を報告し、グローバル教育推進委員会からの助言を研究に生かしている。

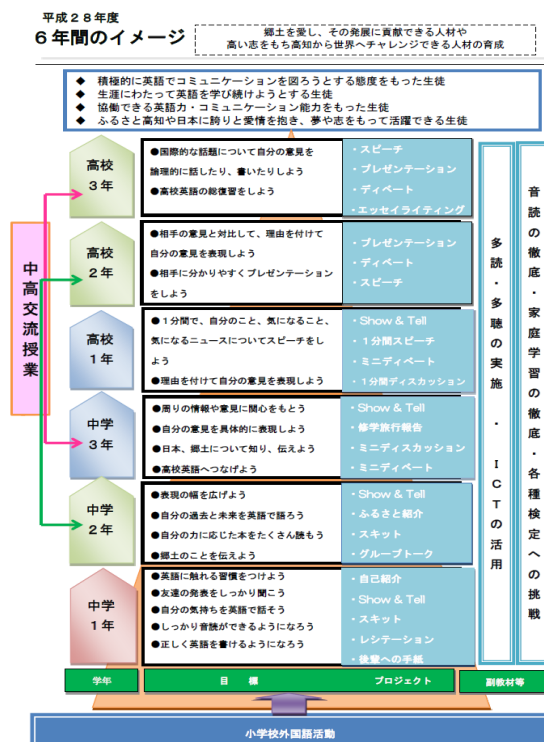


図1 6年間のイメージ

3 研究内容

(1) 「CAN-DO リスト」と「6年間のシラバス」を関連付けた系統的な指導

本年度は、平成27年度に「CAN-DO リスト」と英語科の研究主題（中学校：「主体的に考え、積極

的にコミュニケーションを図る生徒の育成」、高等学校：「自国の文化を理解し、国際的な視点で物事を考え、積極的にコミュニケーションを図る生徒の育成」)の二つの関連から見直した「平成28年度版6年間のシラバス」(表1)を用いて、授業実践を行った。

表1 平成28年度版「6年間のシラバス」中学校2年生(★は研究主題に基づいた視点)

中2	1学期前半	1学期後半	2学期前半	2学期後半	3学期	
年間目標	○表現の幅を広げよう		○自分の過去と未来を英語で語ろう		○自分の力に応じた本をたくさん読もう	○郷土のことを伝えよう
活動	★春休みにしたことについて暗唱で5文以上のShow & Tellを行う ●インターネットの掲示板を読み、コメントを書く ●5文以上で日記を書く	★週末の予定について友達を話し合う ●お願いをスケットをする ★職業体験のレポートを読み、リテリングする ●メールを読み、返信する ★夢について6文以上でプレゼンテーションをする	●物語を聞き、その概要を友達に伝える ★家庭のルールを紹介し合い意見を述べる ★即興で電話の対話をする	★決められたテーマについて理由を付けて8文以上で意見を書く ★夢のマイホームを紹介する ●詩を書く ★おすすめの場所について6文以上でプレゼンテーションをする ★物語を聞き、感想を伝え合う	★映画のあらすじを読み比べる ●好きなものや人等について対話する ●再生可能エネルギーの話を聞き、環境保護について自分の考えを書く ●場面や登場人物を読み取り、ロールプレイをする	
副教材 ICT	リスニング・多読多聴・音読・ライティング					
文法	●be 動詞の過去形 ●過去進行形 ●SV(look)C ●SV(give)OO	●be going to ●SV(show)OO ●SV(call)OC(名詞) ●不定詞(名詞的用法、副詞的用法、形容詞的用法)	●助動詞 will, must, may ●have to	●if 節 ●that 節 ●when 節 ●because 節 ●there is/are ●動名詞	●比較表現	
教科書	Unit0,1	Unit2,3	Let's Read1 Unit4	Unit5,6 Let's Read2	Unit7 Let's Read 3	
リンク	中3Unit0,2	Hi, friends!2 Lesson5,8 中3 Unit3	中3 Unit5/Daily Scene5	Hi, friends!2 Lesson4 中3 Daily Scene 4		
主な言語活動やCAN-DO	L	★Show and Tell の情報を正確に聞き取る。(CAN-DO)	●物語の概要を聞き取り、友達に伝える。(CAN-DO)	●電話で相手からの誘いに適切に応じる。(CAN-DO) ●物語の概要を聞き取り、友達に伝える。(CAN-DO)	★相手に聞き返したり、確認したりして道案内をする。(CAN-DO) ●聞き取った内容に感想を加えてリテリングする。 【CAN-DO】	(物語の概要を正確に聞き取ることができる。)(CAN-DO)
	S	★具体例を示しながら、暗唱で5文以上のShow and Tellをする。(CAN-DO)	●自分の予定を述べたり、友達に尋ねたりする。(CAN-DO) ●状況に応じて、ていねいに許可を求めたり、依頼したりする。(CAN-DO) ●夢についてプレゼンテーションをする。(CAN-DO)	★家庭のルールを伝え、それについて友達と意見を交わす。(CAN-DO)	●発表を聞き、その内容について質問をしたり感想を述べたりする。(CAN-DO) ★聞き手に伝わるよう、スピーチをする。 【CAN-DO】	●状況に応じて、自然な対話をし、買い物をすることができる。 ★つなぎ言葉を用いたり聞き返したりしながら、ペアで1分間対話することができる。 【CAN-DO】
	R	●掲示板の内容を読み取り、自分の経験を踏まえて、コメントを書く。(CAN-DO)	★レポートの内容に自分の考えを入れながらリテリングする。(CAN-DO) ●ALTからのメールを読んで、適切に返信を書く。(CAN-DO)	(聞き取った物語の概要が正しいか、スキミングして確認する。)	(聞き取った物語の内容が正しいか、その物語を読んで確認する。)	★映画のあらすじを読み比べ、見たい映画について話す。【CAN-DO】 ●話の概要をつかみ、自分の考えを書く。 ●登場人物の心情にふさわしい評語をする。 【CAN-DO】
	W	●日常のできごとやGWにしたことなどについて5文以上で日記を書く。(CAN-DO)	★自分の夢を不定詞を用いながら6文以上で書く。(CAN-DO)	(助動詞を用いて、家庭のルールを書く。)	★決められたテーマについて、理由を付けて8文以上で自分の意見を書く。(CAN-DO) ●自分の気持ちを詩に表す。 ★構成を工夫して紹介文を6文以上で書く。 【CAN-DO】	(説明文を読み、それについて自分の考えを書く。)
パフォーマンステスト	●Show & Tell 好きなもの (S) ●日記 (W)	●ベアトーク (S) ●スケット (S) ●リテリング ●プレゼンテーション(S,W)	●グループトーク (S) ●電話 (S)	●意見文 (W) ●道案内 (S) ●紹介文 (W) ●プレゼンテーション (S,W)	●ベアトーク (S) ●音読テスト	
辞書指導	●動詞の過去形、三単現、ing形の記述に注目する。 ●動詞の後に続くものに注目する。	●必要な単語などの意味を探す。	●文章の前後関係から助動詞の適切な意味を考える。	●辞書を使って文章を書く。	●形容詞・副詞の比較級・最上級に注目する。	
家庭学習		【夏】日記を書く。	音読・音読筆写・Drill学習	【冬】校内英語スピーチコンテストの練習をする。	【春】中1、中2の教科書本文を全て音読する。	
検定	英語検定4級合格・高知県中学生英語弁論大会・高知県学力定着状況調査・校内英語スピーチコンテスト					

また、総合的なコミュニケーション能力を高めることができるよう、中学校では「自分の考えや気持ちを伝え合う力」、高校では「情報や考えを的確に理解したり適切に伝えたりする力」を重点的に指導した(図2)。そして、英語担当教員全員が、「CAN-DO リスト」との関連を図り、「英語を用いて～することができる」という単元の目標を設定し、研究授業を行い、その後「授業実践記録」(表3)に成果と課題をまとめた。高校教科会ではその記録を基に、授業実践交流会を行い、授業者の悩みに対して助言をし合ったり、今後生徒にどんな力を育てたいかを出し合ったりした。「評価や指導について自分を振り返って考える機会を得ることで向上できていると思う」、「授業について話し合う時間がもっとほしい」という声も聞かれた。来年度は年に数回教科会で授業を振り返る場を設定し、チームとしての授業力の向上につなげたい。

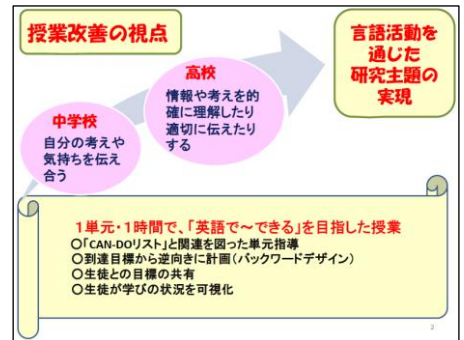


図2 授業改善の視点

「教員意識調査」からは、「バックワードデザインで授業を計画すること」、「本時のゴールを達成させるための言語活動を設定すること」は全員が意識していると答えているが、『CAN-DO リスト』と関連を図った指導、「評価規準に基づいた評価」ができていると答えた教員の割合は、それぞれ53.3%、60.0%であった。このことから、各単元や1時間の授業で英語力の向上を目指して指導しているが、「CAN-DO リスト」から各単元

表2 教員意識調査(抜粋)

項目	(%)
単元の指導や1時間の指導において、バックワードデザインで授業を計画している	100
CAN-DO リストを単元の指導に関連させる	53.3
本時のゴール(目標)を達成させるための言語活動を設定する	93.3
評価規準に基づいて、達成状況を評価する	60.0
自分自身に変容があった	85.7
生徒に変容があった	33.3

の目標を設定すること、目標の達成状況を把握するための具体的な評価を計画することに課題があることが分かった。

(2) 生徒が自己の学びを振り返る手立て

振り返りをすることは、自分の気付きを客観的に見ることになり、自分の学びや成長への気付きを促すことになる。「ALT の家族からの手紙を読んでそれに対する返事を書く」を単元のゴールに設定した中学校2年生の授業（全8時間）では、単元の指導前に授業者が、単元の終わりに生徒が書くことができるようになる英文を構想し達成基準をもって、指導に入った。そして、単元の振り返りシートに毎時間、本時のめあてとそれに対する自己評価を生徒に書かせた。7時間目の授業では、「ALT の手紙を読んで返事を書くことができる」というめあてに照らし合わせた振り返りの視点を提示してから返事を書かせ、その視点で自己評価と他者評価をさせた。その結果、めあてに達成したと自己評価した生徒は93.0%だった。授業で単元のゴール、1時間のゴールを生徒と共有し、1時間1時間が単元のゴールにつながるよう指導すること、どこまでできたら達成したと見なすかという基準を明確にもち指導すること、そして、生徒自身が1時間及び単元のゴールに向かって学びを継続していけるような手立てをすることが重要であると分かった。

表3 「授業実践記録」（中学校2年授業担当者）

単元名 (中心となる言語活動)	単元目標	主体的に考える	積極的にコミュニケーションを図る	成果と課題(○成果 ●課題)
Unit5 Universal Design (言語活動「書くこと」の「聞いて読んだことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること)	○単元のゴール「ALTの家族からの手紙を読んでそれに対する返事を書く」 ・手紙を読んで、その内容に対して返事を書く。 ・自分の考えを整理して積極的に書く。 ・接続詞を用いた文の構造を理解する。	・3人組で話し、フィードバックする活動を入れることで、他の人の意見を参考にし、自分の考えを深化する。 ・高知県の特徴を考え、それを伝え合う活動を通して、自身の故郷のよさや誇れるものについて主体的に考える。	・ICTを用いたパターンプラクティスや意見を述べるペア活動により、自分に合ったペースでコミュニケーションを図る。 ・ペアでタブレット端末を活用し、そこに提示された画像(質問を含む)を見ながら、意見を交換し合う。	生徒の姿(この単元で生徒ができるようになったことや、今後の指導につなげたいことなど)、本単元の指導の振り返り、アンケートや評価の結果等 ○与えられたテーマに対して、短時間でABCフォーマットにメモを取り、それをもとにまとまりのある文を話し、話したことを書くことができた。帯活動と本時のゴールにつながる言語活動両方で、ABCフォーマットを使ったことにより、生徒は話すこと、書くこと、仲間と考えを交流することに慣れ、話したことを書くという技能の向上につながったと思う。 ●帯活動 ⇒ 3人組で身近なテーマについて、伝えたい内容のキーワードをABCフォーマットに書いてキーワードを見ながら、2分間対話をする。 ●本時のゴールにつながる言語活動 ⇒ ABCフォーマットに返事で書きたい内容をメモする → 3人組で伝え合う → 各自が返事を書く ○前時の復習として、タブレット端末を用いたペアによるコミュニケーション活動(提示された画像を見ながら話す)を設定した。全体ではなく、ペアで行ったことにより、自身のペースで、考えて話すことを繰り返すことができ、復習として効果的だった。また、これまで指導してきたアイコンタクト、あいづちができるようになってきた。 ○生徒授業アンケートでは、「ALTの手紙を読み、返事を書くことができた。」という本時の目標に対して、93%の生徒が達成できたと答えている。本時のゴールに沿った評価の視点を返事を書く前に提示し、3人組で返事を交換してそれを読み合う場面でも、同じ視点で評価をさせたこと、そして、指導計画を立てる段階で生徒がどんな英語を書けば目標に達成したと言えるのかを明確にしてから指導したことが目標達成につながったと思う。 ●フォーマットを用いることで型が定着したら、メモを取らずに即興でまとまりのある内容を話し、書けることを目指したい。 ●because等の接続詞を含む文構造(接続詞+主語+動詞)が定着していない生徒も見られた。今後も繰り返し使わせる場面を設定し、定着させたい。

(3) 筆記テストとパフォーマンステストの改善

到達目標が達成できたかどうかを見取ることができるよう、昨年度は筆記テスト、本年度はパフォーマンステストについて研修を行った。今までの筆記テストでは、表現力や理解力を測る問題に教科書や授業で使用したワークシートと同じ英文を使い、記憶で解ける問題があった。しかし、文法事項の定着を図る問題や読むこと・書くこと的能力を測る問題でも、実際のコミュニケーションの場面を想定した中で活用させることを踏まえて作成するようになってきた。また、話すこと・書くこと的能力を測るために、パフォーマンステストを実施した。

「外国人に高知の名所の写真を見せながら口頭で紹介することができる」を単元のゴールに設定した中学校1年生の授業では、単元の始めに、授業者が例として高知の名所紹介のプレゼンテーションを行い、生徒によい点と改善点を考えさせることにより、ゴールとループリックを共有したうえで、プレゼンテーションに取り組みさせた。練習段階では、ループリックに基づき自己評価・他者評価をすること、評価を振り返り再度プレゼンテーションをすることを繰り返した。特に本単元で初めて取り組ませた「対話的に説明する」という点について、全体と個人にフィード

バックをし形成的評価を行ったうえで、単元末に総括的評価として、パフォーマンステストを実施した。パフォーマンステストでは、生徒は ALT にタブレット端末で名所の写真を見せながら、名所や ALT 自身に関する質問を入れながら対話的に説明した。写真は生徒が練習では使っていない初めて見るものを用いることで、即興性を測った結果、全員が目標を十分達成、またはおおむね達成した。ループリックを生徒と共有することにより、生徒がパフォーマンスの質的な深まりを理解し目標を明確にできること、そのループリックを基に自己評価と他者評価をすることにより、生徒が自己の達成状況を客観的に捉え、仲間とともに目標に向かって学ぶことができること、そして、パフォーマンス課題への取組が知識と技能の習熟につながるということが分かった。

4 生徒意識調査及び教員意識調査

(1) 調査対象者・調査時期・調査目的・調査内容

生徒意識調査	教員意識調査
<p>(1) 調査対象者 中学校1年生から中学校3年生 (330名) 高等学校1年生から高等学校3年生(583名)</p> <p>(2) 調査時期 第1回 5月末～6月初旬 第2回 12月末～2月初旬</p> <p>(3) 調査目的 研究主題について生徒がどのような意識で授業に取り組んでいるか、また授業をどのように捉えているのかを把握する</p> <p>(4) 調査内容 研究主題の実現、入学前の英語学習、学校での英語学習、学校以外での英語学習、英語検定等の資格等</p>	<p>(1) 調査対象者 中学校・高等学校全英語担当教員(11名)</p> <p>(2) 調査時期 1月中旬</p> <p>(3) 調査目的 英語授業の指導方法の工夫と授業中の生徒の様子を把握する</p> <p>(4) 調査内容 研究主題の実現、英語の指導、授業中の生徒の様子、英語教育プログラムへの取組等</p>

(2) 調査結果

調査結果のうち、研究主題に関する項目について、生徒意識調査の平成27年度第1回と平成28年度第2回を比較して報告する。

「英語の授業では、課題に対して自分の考えをもっている」と回答した中学生 74.9% → 77.6%、高校生 53.1% → 64.6%、「英語の授業では、積極的に英語を使っている」と回答した中学生 66.5% → 72.7%、高校生 42.4% → 49.0%といずれも上昇した。教員意識調査では、「英語の授業では、生徒に考えをもたせるよう工夫している(発問や活動等)」、「英語の授業では生徒が英語を積極的に使えるよう、工夫している」と回答した教員はそれぞれ 100%、93.3%である。2年間の研究を通じて、授業者が説明する授業から、中学校・高校ともに、授業者はモデルを示し、生徒が英語を使う授業へと改善されてきた。生徒が考えや気持ちなどを伝え合う、対話したことを書く、読んだことについて考えを交流し合った後、自分の考えを整理して書くというように技能統合型の言語活動を取り入れた授業を通して総合的なコミュニケーション能力を高める工夫をした結果である。また、高校では、教科書の題材を身近なものとして捉え、主体的に読み進めていくことができるよう、単元を通して考えていく問い Big Question を設定し、最後に自分の考えを仲間に伝えるという活動にも取り組んだ。

5 本研究の成果と今後の取組

成果は、生徒の積極的にコミュニケーションを図る態度と英語運用能力の向上を目指し、「英語を用いて～できる」という目標を設定し、実際のコミュニケーションの場面を考えて情報を伝え合う必然性、相手意識を踏まえ言語活動を位置付け、生徒が英語を使い、英語を活用して定着を図る授業へと転換してきたことである。

平成29年度は、6年間・3年間という学習到達目標の達成に向け、「6年間のシラバス」に沿って学年を超えて指導内容や生徒の様子を交流する。また、各学年で生徒の達成状況を把握し次の指導の確認等を繰り返すこと、目標に照らし合わせた指導と信頼性のある評価方法の研究を進める。